

# view point

THE SAISON FOUNDATION

64

セゾン文化財団ニュースレター第64号  
2013年8月31日発行  
<http://www.saison.or.jp>

公益財団法人セゾン文化財団

The Saison Foundation Newsletter — 31 August, 2013

## 目次

- 小池博史◎旅を巡って——サバティカル雑感…………… p.01
- 手塚夏子◎根を張る日々…………… p.06
- 松岡和子◎つなごうとする意志——2013年上半期の舞台を見て…………… p.10

Article—①

## 旅を巡って ——サバティカル雑感

小池博史  
Hiroshi Koike

まだまだ世界は広く、そして極端に狭くなった。それを強く実感したのが2012年度にセゾン文化財団からの助成を頂いて、スペイン、モロッコ、セネガル、イスラエル、タイと歩いた旅だった。

ぼくは今までにパパ・タラマラでは35カ国、個人的な会議出席やワークショップ、旅を含めれば60カ国程度は動いてきた。だが、公演ツアーやワークショップのために出るときは、どうしても多くの制約がまとわりつき、さほど世界を知ることはできない。目的はあくまでも公演やワークショップで、そこに向かって最大限のことをすることである。毎年、繰り返し出て行ったにも関わらず、劇場周りとその都市の一部

を知ったに過ぎない国は数多い。

### 旅について

旅はひとりで歩くに限ると思ってきた。誰か相手がいると、どうしても共有せざるを得ない時間が生まれ、楽しくもあるがすべての感覚が分散しがちで、自己との対話は生まれにくい。たとえば……メキシコの、真っ青な空の下、片田舎の一本道を歩くでしょう。熱せられた大地を嗅ぎ、目は光を、鮮やか過ぎるほどの色彩を捉える、足は道を踏みしめる感触を、耳はその音を、からだ全体は熱を受け止めて汗が噴き出すとき、ファン・ルルフォやオクタビオ・パスのことばがフツと風のように過ぎて、その意味を痛いほど知る。たとえばグアテマラの空港から朝一の飛行機でサンパウロに向かう。そのとき、早朝に頼んでおいたタクシーが来ない、依頼したエージェン会社まで走って扉を叩くがナシのつぶて、さてどうする？と一気に頭は回り出し、ひとりで次なる行動に移さねばならなくなったときの激しい焦り。たとえばトルコの Cappadocia 近辺をオートバイで走るとする。目的は決めずにあちこちへ移動、気の向くままに変化し続ける荒涼とした風景を自分のものにしていく贅沢と自在感。たとえばクロアチアの名も知れぬ村のバス停に降り立つと時間が止まったかのよう。人々も止まったままだが、瞬時、その、いかにもクストリツァ映画の登場人物らしき人々が動きだし、

私自身も一員となって映画に焼き付けられてしまったかの如き、<sup>たふ</sup>妙な幻影と見知らぬノスタルジー。夜中、アメリカはユタの山中、車を走らせては疲れ果て、ヘッドライトも車内灯も消して休息したとき。降ってくるのはこのことかと思えるほどの空一面の星々。そして再び車を走らせて二時間後、ぼんやり山稜が明るくなってきたかと思うと、突然、目前に眩しく輝く光の海。真夜中2時のラスベガス、その衝撃。

旅は音を全身で受け止め、色彩に溶け込み、人々の匂いと濃密な視線の中を歩くことだ。それがぼくを見知らぬ感覚世界へと誘っていく。なんとも幸福な気分を満たされる。だから時間を見つけては、少しでも世界をひとりきりで歩きたいと思ってきた。次第にそんな贅沢は許されなくなったが、思いは常に見知らぬ場所にあった。

多くの作品制作に関しても同じで、思いは未知の世界をいかに作り出すかだった。ゆえに、創作作業ではいつも破壊と創造の境目を漂った。壊しては、新しく見たことのない世界を模索する。ただの新しさではない。あくまでも深淵に繋がり、この世界と異界を繋ぐ作業にすする必要があった。

### 3.11が問うたこと

3.11は激烈な衝撃をもたらした。あの震災・事件がなかったらパパ・タラフマラを解散することも、サバティカルへの応募もなかったと思う。しかしそれは、衝撃ではあったが予兆通りの結果とも言えた。予知能力がぼくに備わっているはずもない。あのとき、今にも切れんばかりの細々とした糸で現世界と結ばれていた深い部分の叡智が壊れ、断ち切られたかのように感じた。ただその可能性は1990年代半ばから漂い出し、それが壊れれば、もはや人間は立ち直れまいと思っていたから衝撃は一際であった。資金面の問題があったため、金の話ばかりが取り上げられもした。しかし些末ではないが一義ではなく、要はそれを成り立たせている我々自身の立脚点と哲学の問題が最大の疑念であった。21世紀に入って状況は芸術全般含めて悪化の一途を辿り、人はその流れに追随するのがトレンドとなって深みに嵌っていった。

3.11はぼくにすべてを捨てよ、と問うたのである。新たにやり直す勇気を持って、と語りかけたのだ。その覚悟が新たなパラダイムを切実な思いで生み出し、獲得することを可能にする、と。過去の経歴や形などなんの役にも立たないと噛みしめた。

思えば、パパ・タラフマラ時代も数多く海外を動いたが、それ以上にメタファーとしての旅の連続だったと思う。新しい風景、形に出会いたくて仕方がない。だから1996年からは普通に異文化圏の芸術家たちを作品に入れ込むことで、異を積極的に取り入れ、可能性を探った。あるいはぼく自身も外にしばしば出ては戻った。異文化のなかで自身を知るため、そしてそこから新たな別回路の作品を生み出すためであった。

### なぜ、サバティカルか

3.11後、立ち返ってはぼくの原点を見つめ、旅のなか、素の状態に戻ってひとりきりの対話を行いたくなった。そこでサバティカルに応募したのだが、そのとき、脳裏にあったのは創作を欲した原点である。そもそも創作活動を行うようになったのは、多くの偉大な芸術家たちの、圧倒せんばかりの作品力がどれほど見る者、聴く者に生きる力を与えるか身を持って知ったからで、その力に鼓舞されるかのように自ら

創作してきた。なかでもアントニオ・ガウディ、ピカソ、ルイス・ブニエール等のスペイン人アーティストの作品群は大きな源泉力となったが、ヨーロッパはほぼ歩いたにも関わらず、スペインには足を踏み入れることができずにいた。だから真っ先にスペインに行きたいと思った。特にガウディを体感したかった。建築物は歩いてきてはくれない。その後、南下して、アラブ文化とアフリカ文化を味わうために、迷宮のモロッコ、音楽と美術のマリ共和国、セネガルへと移動し、それからトルコ周りで宗教が混在するイスラエルに滞在、帰り道、タイにも寄るという予定を組んだ。タイ以外はまったく行ったことのない国々である。特に楽しみにしていたのはマリ共和国で、マリの東北部のサハラ砂漠にも行こうとしていた。

応募したのは2011年10月。この時点で円は高かった。幸運にも助成を得て、モロモロの調整を図り、実際に出発できたのは2013年1月2日だったが、すでに円は2011年10月に比べ約12%ダウン。それからもどんどん下がりサバティカル期間中に約18%下がる。かつ、応募段階で調査したエア一代に比べ、倍近い航空運賃が掛かることがわかり、仕方なく成田、パリ間の往復航空券を購入、あとは可能な限りLCC(格安航空会社)のフライトで乗り切ることにした。それでも航空運賃代は総額で60万円を超えた。最初は可能な限りの陸路移動を考えてはみたけれど、時間が許さず、飛行機での移動は必須だった。おまけに渡航期間中にマリ情勢が悪化、ぼくがマリに渡ろうとした10日前には日本人がアルジェリアで10名殺害される事件が起きた。その日、ぼくはアルジェリア国境近くのモロッコのサハラ砂漠にいたのである。それでも渡航しようと思っていたが、事前に連絡を取っていた在マリ日本大使館から絶対に来るなと厳命され、セゾン文化財団にも相談した結果、行かないことを決め、航空券のキャンセルを試みたが不可、カサブランカ⇒バマコ、バマコ⇒ダカールのエアチケットが無駄になる。そのようなこともあって、とにかく貧乏旅行になった。

### スペインにて

パリを経て1月3日夜、スペインのマドリッドに入った。トレド、コルドバ、セビリア、バルセロナと歩く。マドリッド、コルドバ、セビリアではフラメンコを見た。観光客向けのショーではあったが、素晴らしかった。踊りも良かったが、それ以上に歌とリズムこそがこの芸術の主体だと知った。スペインの食事はおいしかった。90年代半ばから少しずつヨーロッパへの興味が薄れていったが、その多くは食事と全体の文化に依拠する。おいしい食事はなくはない。フランス料理やイタリア料理など、本格的な素晴らしいレストランに行けばうまいに決まっている。しかしアジアの料理に比べ、日常の食べ物は何とも淡泊。まずくはないがすぐ飽きた。もちろんヨーロッパと言っても単一には語れない、どうしてもなく飯のまずい文化圏もあれば、マシンな文化圏もある。が、アベレージは低く、加えてヨーロッパの思考性、嗜好性に興味が薄れ、ヨーロッパ的なものに対し幻滅を覚えたため、特に西欧からは徐々に足が遠のいていった。

その点、スペインはマージナルな文化色が濃厚で、食ばかりか文化全体の嫌な感触も含めてのごった煮感があり楽しかった。どの街へ行っても美術館等には足を運んだ。ねっとりまとわりついた血、それがスペイン美術、美術館の印象である。特に素晴らしかったのはバルセロナのソフィア現代美術館。ブニエールの未見の映画とピカソ



2013年1月17日 ワルザザード-1

の「ゲルニカ」をはじめとして、多くの美術を見たが、ぼくにとっての白眉はこのふたつ。ともに「血」と「地」と「知」が渦を巻いていたのである。ガウディは圧巻であった。成長し続ける可能性を見ているような気分になった。人の意思が育って、可能性を残し続けるがゆえの幻惑。ぼくは中学三年の時に、ガウディの建築写真を見て建築家を志したが、その時感じたことがそっくりそのまま40年以上も経過して立ち現れ、母体内で抱かれているような安楽な気分になった。

### モロッコにて

スペインは興味深い国ではあったけれど、所詮ヨーロッパである。それがモロッコに入って一変する。スペインとは海を隔ててすぐの場所に位置するが、初日、夜中にバルセロナからマラケシュに着いた途端にモロッコの迷宮にやられた。そう、モロッコを一言で現すならば、「迷宮感覚」。これは追々、街の情景と共に綴っていきたい。マラケシュではメディナと呼ばれる旧市街地の安ホテルに宿を取ってはあ



2013年1月17日 ワルザザード-2

たが、簡単には辿り着けず。空港からはタクシーを使って近くまでは行った。歩き出すと、色味も街路の感じもまったく同じようで、どこがどこやらまったくわからなくなった。最初は寄ってきた自称案内人たちを拒否して自ら探したけれど、1時間近くも巡り巡って諦めた。街は土色、ジェラバという民族衣装を着た人たちがネズミ男のように路地の隅に佇む真夜中。街角に立つ連中は金になるとなればすぐに寄って来た。

マラケシュから始まったモロッコの旅だったが、金の亡者たちとの付き合い合いとなる。15歳くらいのかわいらしい女の子がポン引きであったり、自ら売春婦となろうとしたり、マリファナ売りはそこかしこ、マラケシュの迷路にいる子供たちでさえ、多くが亡者のようであった。

次にワルザザードという砂漠の入口の街に入る。ここは砂嵐が一日の半分近く吹き荒れた。その時期は砂嵐の時期だという。砂の中、レンタカーを借りてカスバ街道を走った。そこかしこに土でできたカスバ(城塞)が点在し、砂嵐が吹くと、情景はすべて一色の茶色に変わる。木々も茶色。空にまで砂は舞い上がって、色味は単一となり、昼間なのにモノトーンの世界にいるような気になった。また、こんな環境ではなぜ砂漠の民が布をグルグル顔に捲いているかがわかる。砂は脅威だ。と突如、砂の中に湖が出現、まさにオアシスだった。

砂漠の中のベルベル人の小さな街、メルズーガを訪ね、ここからサハラに入った。サハラを案内してくれたのはベドウィンのガイドで、彼の家族はブラックサハラにいと流暢な英語で話した。学校には行っていないという。英語、フランス語、スペイン語、アラブ語、ベルベル語を話す彼の母語、母国語以外の語学はすべて、ガイドをしながら外国人から学び、彼の収入が一家15人の現金収入の大部分で、



2013年1月20日 サハラ砂漠-1



2013年1月20日 サハラ砂漠-2

ベドウィンでありながらも消費経済に巻き込まれていることを寂げに語る。事実、貧乏の悲しさにかこつけながら、砂漠の上でベドウィン商品を売りつけようと一所懸命だった。

この砂漠はさらさらの砂がなだらかな丘陵を作っており、日本人の抱く典型的砂漠イメージそのもの。たいがいは少しの草木やサボテン、石ころが転がって、砂漠らしくはないのである。

なだらかではあっても小高い砂山があり、砂に足を取られながら砂の山を登ると、風はかなり強い。稜線に沿って砂が舞い上がっては降ってきて、視界を遮り、呼吸器に入り込み、息苦しさで砂崩れによって真逆さまに転げ落ちそうになる。砂の恐怖はその中に入ると際限なく砂が増殖し、方々から沸き上がってくるかの如く感じられることだ。砂の織りなす景色に興奮しながら夢中になってカメラで遊んでいると、足がズボズボと散り、砂の溝に転げ落ちもした。途端に砂はからだの内側の隅々どころか、からだの穴という穴すべてに潜り込む。その後、からだ中から砂は何日にも渡って湧きだし、止まらなかった。

砂漠は美しいが瞬く間に脅威に変身する。1月のこの時期、日が暮れようものなら、砂漠はたちまち冷たくって足から熱を奪っていく。ベドウィンの案内人は夜を徹して砂漠を歩くこともあるという。月の砂漠ならまだしも、夜、砂嵐の中では、ぼくのような部外者には恐怖で

しかない。彼らはそれでも歩く。感覚が育てた知があつてこそだろう。宿に戻って思い返してみると、タンジールに住みついてしまったアメリカ人作家、ポール・ボウルズがモロッコに魅せられた意味がわかったような気がした。底知れぬ感覚と迷宮から生み出された知の世界。

メルズーガからフェズ、シャウエンと歩き、メクネスへと辿り着く。フェズは迷宮都市として名高い。ぼくは昔からフェズに憧れ、今回も大きな楽しみにしていた。迷路状の道は幻感装置となって、人がヒョイヒョイと土色の壁から影のように現れ出ては消える。そこかしこに吊された、色とりどりで凝った細工のモロッコランタンが灯る頃になると、ますます幻惑感が増していく。土色の街は電灯周りだけがポツと浮かび上がり、子

供たちの喧噪ばかりが響きながら重く沈んでいく。時間の感覚が消えて場所感覚もなくなってしまえば、土色の迷路をグルグルと回り続けることになる。それは心地よかつたが、結局は人である。フェズのやかましい商売人たちにはほとんどウンザリさせられた。ホテルの従業員は親切だったけれど、一歩外に出れば魔界となった。マリファナと売春、商売人は商品を売ろうと血眼だった。

それがモロッコだと思っていたが、メクネスに入ってその印象は一変。両都市ともに古都で、その距離は50キロだからまるで京都と奈良。にも関わらず街の感触はまるで違う。街に入ったのが祭りの日。至るところでラップ系の古楽器が鳴っており、ポカリと空洞に放り込まれたかのようで時代感覚が狂った。ホテルの場所がわからずウロウロしていると街角に立っていた青年が案内してくれたが、案内料は受け取らない。驚いた。他の街ならば必ず金を要求されたのに、ここでは誰になにを尋ねても金は不要。商売人たちもノンビリとして、買いたいならどうぞ、との態度を崩さない、無理に勧められることもない。街には瞑想音楽が鳴り響き、その音楽に釣られるかの如く、街を漂い、水パイプを吸い、伝統的水行商人から革袋に入った水を買って飲み、市街地の外からライトアップされて浮かび上がる旧市街を見つ



2013年1月25日 メクネス



2013年1月28日 エッサウイラ



2013年2月2日 ダカル

めた。夜の街の行商人たちも至って快活で、親切過ぎるほど親切だった。当然のように滞在日数は延びた。

音楽はモロッコのどこへ行ってもいつも耳にした。この旅はスペインから始まったアラブアンダルースの音楽の旅でもあり、ぼくはこの地域の音楽には昔からずっと惹かれてきた。特にメロディの美しさは絶品である。

## セネガルにて

その後、エッサウイラ、カサブランカを経てセネガルのダカールに入った。夜中1時着。笑ってしまうほどダカールは危険がいっぱい。空港ですら、10メートルを勝手に案内した振りの青年2人が案内料だと言って10ドルを請求してくる。追い返してもオンボロタクシーを追い掛けて来てはボンネットを激しく叩いた。ダカールの街中は人間と車が混濁し、両者ともに道路に溢れ返っている。排気ガスが充満し、目が痛くなり、喉がガラガラになった。この街の危険度が夜、急激に跳ね上がるのは言わずもがな。セネガル人の肌の色は真っ黒だから夜になれば闇に溶ける。その中でぴかりと光るのは目ばかり。昼間でさえ危険に溢れた。知人の写真家はアフリカへ行ったら走って移動すると言っていたけれど、確かにノンビリ、ゆっくり歩いて、カメラをぶら下げていようものなら、すぐに狙われる。どう見たってこっちは外国人だ。たいがい外国人は車で移動し、外をノンビリ歩きはしない。いろいろな危険があるけれど、Tシャツ売りが近づいてきたらすぐに離れること。Tシャツでこちらのからだを隠し、と同時に数人の仲間がズボンから財布を抜き取ろうと一気に近寄る。人の少ない方にこちらが移動しようものならカモである。だから常に人の目を気にしながら移動せねばならなかった。

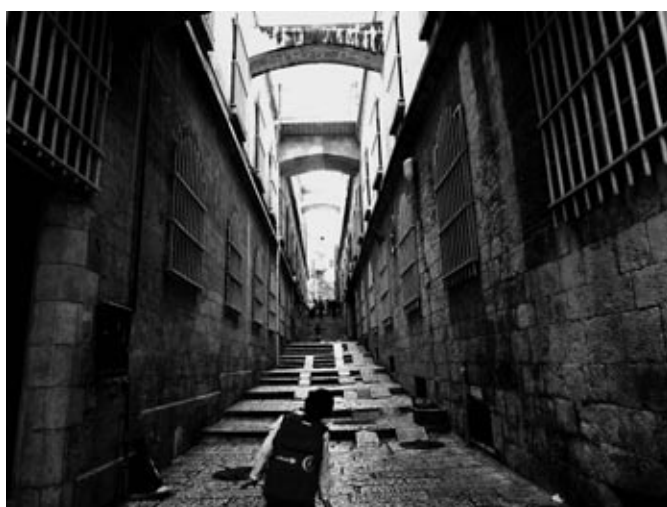
それでも毎夜、ぼくは音楽を聴きに出た。ライブハウスやアリアヌフランセーズで行われる音楽イベントに通い、すべての音楽が素晴らしかった。隣国、マリ共和国から逃れてきたアーティストたちが多く出演する演奏も聴いたし、美術館に行けば、その圧倒的な力量にこの国の嫌な面など瞬く間に吹き飛んでしまった。改めて人の進化とはなにかを思った。西アフリカの美術はもちろん、太古の芸術を目にすると、その凄みにタジタジとなってしまう。クロマニヨン人が15,000年前に描いたとされるラスコーやアルタミラの洞窟壁画以上の精神的表出を、果たしてその後の人類は再獲得できたのだろうか？ 人の作り出す音楽や美術はまさに心の表出である。それに対し、欲望渦巻くのはモノと金、権力に対する執着だが、その心が芽生えてからは、人が作り出す芸術は退化に向かったのではないか。金と権力への執着と浄化される音楽社会。ぼくは複雑な思いでセネガルを後にした。

## イスラエルにて

イスタンブールを経て、イスラエルに入る。エルサレムに少々長く滞在して、この街を見て回ろうと思ったのだ。夜、ブラブラ歩いていてもまったく危険性を感じない街だが、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖地として、凝縮したエネルギーが各々凄まじい力で押し寄せ、重い空気がずっと澱んでいるようであった。聖墳墓教会というキリスト教会の中でさえ教会四派が分かれて他を遮断し、拒絶している。宗教は芸術と同じく、人であるがゆえに生じた隙間を埋めるものとしてなくてはならぬものだろう。けれど、宗教ゆえに人を殺し、富を奪い、権力を欲し、土地を占拠してきたのが人である。エルサレムでは否



2013年2月6日 エルサレム-1



2013年2月6日 エルサレム-2



2013年2月8日 ベツレヘム

応なく宗教の意味が打ち寄せる波の如く問い返されては、足はメディナに向いた。わかっていたはずが、宗教の迷路に入り込んだようになって、ぼくはメディナ内を幽鬼のように歩き続けた。

そこでベツレヘムに逃れた。ベツレヘムはパレスチナ自治区の一部であるにも関わらず簡単に行き来できる。しかし物価も人の感触もまるで異なり、この街はエルサレムとは別の意味でジツトリと澱んで、晴れない。イスラエルとの間にそびえ立つ壁があって、そこに殴り書き

## 根を張る日々

手塚夏子  
Natsuko Tezuka

されていた文言。

「This is illegally occupied land. State of Palestine 194」

次にテルアビブへ向かう。テルアビブはきれいだったが、アメリカの一部であるかの如き状態をしばしば見せつけられ、居心地は悪く、ここも気分が晴れない。イスラエルでは人であることの意味をずっとぼくに問い続けたのだった。

それからパリ経由で一旦2月14日に東京に寄り、公演を行って再びサバティカルの続きで2月25日にタイのチェンマイに行き、東京に戻った。それが3月8日のことである。

### 旅の記憶

さて、この旅がどういう結果をぼくにもたらしたか、そんなことは簡単にとは言えない。旅は将来に渡って不断に自身に問い掛けてくるものだからだ。それは記憶となって染み付き、私のからだに澱のように残る。見た物、聴いた音、空気の感触、時間の流れ方、匂い、温度……これらが一体となって今後のぼくを形作っていくだろう。それが旅であり、旅の意味だ。

サバティカルでは素晴らしい時間を頂いた。今後、どう生きてくるかはぼく自身の楽しみでもある。感謝。



Photo: Minsa You

### 小池博史(こいけひろし)

演出家・作家・振付家・舞台美術家、'舞台芸術の学校' 校長、「小池博史ブリッジプロジェクト」代表。茨城県日立市生まれ。1982年「パパ・タラフマラ」設立。以降、全55作品の作・演出・振付を手掛け、35カ国で上演、国際的評価を確立。その他の作品も各国で多数制作。つくば舞台芸術監督、アジア舞台芸術家フォーラム委員長、国際交流基金特定寄附金審議委員等を歴任。2012年5月、パパ・タラフマラ解散。翌月、「小池博史ブリッジプロジェクト」発足。「ブリッジプロジェクト」では教育、創造、発信を三本の柱とする。創作では、現在、宮澤賢治シリーズと「マハーバーラタ」シリーズをアジアの古典アーティストと共に展開中。

<http://kikh.com/>

### それまでの人生

ずっと閉塞感を感じていた。いつの頃からなのだろうか？ ありのままに生きられない。お互いどうし監視しあっているような窮屈さ。表面的に見えている物事と、実際その下で起きていることの乖離、そういったことを薄々感じていたのは子供の頃からだったと思う。けれども、それを具体的に観察することに快感を覚えるようになったのは、痛みの味を知った大人になってからだ。そして、演劇やダンスや文学や映像作品を作っている人たちに会った。けれど、何がよくて何が悪いか？ たくさんの価値観の海の中で、情報を処理しきれないと思ったとき、自分が本当にどう感じているか？ から出発して物事を試行錯誤していいんだ、と思うことができた。いろいろ実験していてもいいのかもしれない、と思えた。今ある何かの価値を選択して自分の足場を決めるのではなく、足場だと思っていたところを疑って行きながら、価値観の可能性を問い続けるという方法があると思えた。だから閉塞感にも向き合って生きて行ける、そういう前向きさが私の根底にはあったように思う。けれども震災が起きた。

### 震災が起きた

2011年3月11日以降、震災によって起きた原発事故、放射能漏洩、情報操作、利権を追求する企業の態度、そちらに追随するのが常識の企業世界と、起きていることに向き合いきれずに分裂していく人々の価値観、そういった一連の動きの中で、私も前向きに観察することが難しい精神状態に追い込まれていった。一番大きかったのは、とにかく「不安」というものだったと思う。具体的には自分の子供の安全に対してである。こういった不安は理屈ではなく、自分の体の深いところに作用してくる。実際のデータであるとか、証拠であるとか、情報の正確さであるとか、そういったこととは関係なく、不安は体を蝕む。もう一つは、自分が世界を認識していたその様が、実際の世界とは違った、という感覚である。価値観を固定しないでいたいという思いで試行錯誤して来たつもりだった。けれども、それはほんの一部にすぎなかったのだ。与えられた情報の中からは程度都合よく自分を安心させるように世界を認識しようとしていたのだ。だから、現実に向き合ってはいなかったと言っても過言ではない。結局は様々な依存の中に自分を置いていたのだ。その意味で、むき出しの現実がグロテスクな姿をさらし始めていると感じたときの恐怖といったらなかったのだ。自分がこれからどのように生きて行くか？ 今まで生きて来た物事の延長線上で生きることはできない、と感じると同時に、その足場のなさ、規範のなさは本当に不安をもたらす要因になっていった。

## 震災直前の日々 暴力の連鎖について考えていた

セゾン文化財団の助成を受けることができたのは震災が起きたちょうど一年前の2010年度だ\*。その頃、アジアインタラクティブリサーチという新しい取り組みを始めたばかりだった。日本という国の領域を疑って古い芸能を観察する試みであり、また同じような取り組みをいろいろなアーティストと共有するという内容だった。2010年に助成が始まる少し前の時期から、私自身がしてきたこと、感じていたことをいま一度たどりながら、3年間の助成期間が私にとってどのようなものであったのかを見て行きたいと思う。

そのころ、あるカウンセリングの方との出会いがあって、ドメスティックバイオレンスの加害者のためのワークショップというものを見学する機会を得た。加害者といっても、普通の男性である。その特徴といって、普通の男性であるというのが一番強い印象だった。その彼らがなんらかの理由で女性に暴力を振るってしまう、そのことに自分で向き合うためにワークショップを受けていた。その経験は私にとってはそうとうショックだった。そして暴力の連鎖について改めて考えさせられた。そこには誇りを失い続けている人々(それは結局私たちなのだが)の姿が浮かび上がって見えた。そして、それらの間が『私的解剖実験-5〜関わりの捏造〜』に結実して行った。

## 「渴き」について観察していた

また作品作りの中で自分が関わる若い人たちの中にある自己否定感とそれともなう憎しみにも似た感情があるのを感じて、それはいったい何なのか? について考えていた。自己否定的になるところから発する、「評価を欲する」感覚というものがある、それは渴きと呼ぶのにふさわしいと感じた。どこかからの評価で満たされたいと願っていてもかなわないから渴いて行く。あるいは評価され続けても満たされることがない。大きく言えば、土地が乾ききっているのかもしれない。評価を得るためだけに何かを作る。そういった小さく閉じてしまった輪の中にあるような閉塞感。また、私たちの足もとから何かを吸い上げることができないような渴きというのは私の中にもあった。その渴きを何によって自覚したのかはわからない。けれども、2006年から住み始めた神奈川県藤野という土地で、祭礼のお囃子を聞いたときに、

自分がそこにつながりたいという切望みたいな何かが刺激された。その感触は今でもくっきりと残っている。そこがリサーチの原点だったと思う。そして、日本でコンテンポラリーダンスをやっているという自分の足下を掘り下げてもどこにもつながっていないような気がするということ、祭礼のお囃子が自分の深いところに何かの影響を与えるという、その二つの物事をなんとかつなげることができないだろうか? というような切望が生まれて行った。

## 「私たち」とは誰か?

そして、その問題意識をとっかかりとして、助成がなければ難しかったであろうたくさんの民俗芸能、伝統芸能の調査を行うことができた。植物が花を咲かせ実をつけるために必要な最初の行為は根を張ることだ。表面的には小さな双葉がちよこんと開いているだけに見えるときでも、地面の下に根が伸びて行くといったように、私は自分の渴きを感じながら、下へ下へと水を求めて根を伸ばしていった。つまり具体的には、様々な民俗芸能を見に行っただけでなく、芸能を教わっていただく機会も得た。その一つ一つが、自分が固めて来てしまっていた「日本」という概念や、「芸能」という概念をことごとく瓦解してくれた。たくさんの驚きと共に、古い芸能を咲かせ続けた肥沃な土壌のことを思った。それらは、人々の内発的な行為としてあり、外からの評価とは関係なく彼らの誇りを支え続けていた。ただ、どの土地でも当然のことながら、私は外の人間であり続けた。かといって、それぞれの芸能は決して排他的ではなかった。私はそう感じた。外の人間を疎んだり、邪険にしたりすることなく、暖かく迎え入れてくれた。そういった懐の広さというのは、そこに自負に近い誇りというものがあるからなのだと感じる。そして、彼らはその芸能やそれを捧げる信仰によって守られ、位置づけられている。しかし今に至るまでには、様々な状況、飢饉や、圧政、重労働、戦争の影響、などにさらされ続けたのだらうと思う。そのような中でぎりぎりの彼らが発した内側からの声、言葉、歌、そして踊り、そういったものが彼らの芸能を立ち上げ、鍛え上げ、彼ら自身を生かし続けたのだと思う。また、都心から行った私たちと彼らとの大きな違いはindividual(個人)に対して限りなく「dividual」であるという点である。自分という一つの体の領域で線引



2011年8月 愛知県の東栄町にて  
「御園の花祭り」のリサーチ風景

きされていない、何かを常に人と共有することで体がなりたっている、そういった感覚である。そして、調査をするにつれ、私の中に様々な問いが突きつけられることになる。まず「個人」というふうに自分を線引きするということは、ある一方ではとても自由である。自分が何を感じ何を欲し、どう行動するかは自分で決めることができるし、誰かに遠慮することもない。しかし、そんな中で、利益を追求しようというのはとても殺伐とした感じがする。「dividual」というのは、線引きできない感覚として私が言い出した造語だけれど、そこには一つの窮屈さがある。例えば「村社会」という言葉があるように。しかし、同時に自分を受け入れ位置づけてくれるコミュニティーや信仰に包まれているとも言える。

しかしもちろん、どちらがよいというような議論ではなく、関わりについて考えるひとつの視点を持つことが重要だと感じた。また、誇りについて考えていた。「信仰」というものを失って久しい私たちにとって、何が自分を位置づけるのか？ 位置づけられないということが、自分の誇りを失わせ、どこかからの評価にしがみつき、評価によって自分を位置づけようと必死になってしまうのではないかと。私たちは所詮「individual」というふうに自分をとらえることができない身体感覚を持ち続けているのではないかと。そして、私たちが、失った足もとの向こうの向こう側に見えている、民俗芸能の歴史になんとか接続できるような、現代における取り組みというものはないものか？ そもそも、こうして多用する「私たち」とは何なのか？ と。そして問いに向き合うことが小さなアウトプットを欲し続け、継続する中間報告が始まった。そんなとき、震災が起きた。

### 震災後を生きる中でのリサーチ

震災のショックが私に与えた影響は、思った以上に大きかった。具体的な生活の変化、そして、生き方そのものへの検証と共に、私が作品を作り続けることの意味、役割の可能性について、本気で検証しなければならなかった。とにもかくにも、不安な状況から少しでも心を落ち着かせて生きる場所を求めて、母子避難からすべてが仕切り直しとなっていく。避難するということは、いろいろな周りの状況に対して抗ってでも敢行するというような行為だ。しかし、私はとにかく内側からの求めにしたがうよりほかなかったし、またここまで激しく突



ただの「実験」がメディアになるのか？ の実験  
2012年8月30日 東京国立近代美術館

き上げられるということも今までになかったのかもしれない。そしてそれは理屈を超えているし、理解できない人に説明するというのも難しい。ここで、本当のアウェイな状況が生じてくる。いろいろな意味で少数派になって行く。そして移住した土地は、古くからのコミュニティーが続いて来た場所であった。そして、そこに住むという行為自体が、究極のリサーチと言ってよかった。つまり、古くから続くコミュニティーにおける人の関わり方、私が問いとして持っていた「individual」に対しての「dividual」である。それは、個人として線引きできない人の関わり方である。「線引きできない」というのは、例えば習慣を共有しながら一緒に生きて来た人々特有の、自明のものに対しては説明しないという感覚でもある。「暗黙の了解」という言葉があるけれど、それは共有しているはずのことを大切にすることがゆえに、言葉で線引きすることをさけるという意味合いもあるかもしれない。そういった一つ一つが私にとってはあまりにも今までの生活とかけ離れていた。自分の中にあるdividualの感覚をもう一度観察し直すことになって行く。今まで民俗芸能を観察していたことの問いをさらに深めた問いが次々と私の中に立ち上がって来た。また、今日本で起きつつある事態に対する問いは、これらのいくつかのトピックと深い関係があった。その問いと試行錯誤によって新しい作品を作ろうという思いが自分の中からもう一度よみがえってくることができたのは、その起きつつある事態に向き合うことで生きて行けると思えたからだ。

### 反応に反応する脈を復活させたい

まず私たちは、かつての芸能がそうであったように今現在の何かにたいして反応できているのだろうか？ 例えばあれだけ大きな震災が起きた。ただの震災ではなかったはずだ。それらに反応することで自分たちを生かそうとしているのだろうか？ 教育や情報に対するある種の従順さが、反応する体を奪っているのではないだろうか？ それは評価を求めることで生きるという習慣の中に没してしまっているからではないのだろうか？ いつでも自分が俯瞰した評価基準にあてはまるかどうか？ 自らその視点で自分を見ってしまうことによって、自負ではなく俯瞰した評価基準によってしか自分を位置づけることができない。あらゆる評価基準で埋め尽くされている世界の中で喘いでいるから、自分が何かに反応することなど思いもよらない。もちろん、これがすべてではない。やや悲観的に見すぎているかもしれない。けれども、こういっ



Asia Interactive Research 中間報告 vol. 02「民俗芸能と3.11以降」  
生きたいから反応する(2011年5月21, 22日)  
小金井アーツスポットシャッター 2F



た思いが、もう一度反応を取り戻したい、反応に反応する脈を復活させたいという気持ちに火をつけた。そのためにはまず私が民俗芸能に反応しようと思った。そして民俗芸能に対しての問いを「実験」に落とし込むという行為から、「実験」そのものがメディアとして人々に機能しえないのだろうか？という問いが生まれて行った。自分が何かに反応しているさまを実験に落とし込む。その実験に人々は作品としてではなく単なる実験として参加したり見学したりする、そしてそれに反応せざるを得ないと感じるような場が生まれる。そしていろいろな人が反応を実験に落とし込むという反応が生まれ続けて行ったら？そういったことは現代における芸能に値するのではないだろうか？と。そして、「ただの実験がメディアになるのか？の実験」という試みが立ち上がっていった。

### 目的以外の何かが生まれる場としての「実験」

私自身が実験するだけだったら、今までの作品名にも「実験」という名がついているし、劇場空間での上演であっても実験的な要素が常にあった。けれども、作品として提示されることのよい部分もあれば足りない部分もある。そして、できるだけそれぞれのフィールドで生きている普通の人々が、つまり表現のアウトプットとは無縁に見える人々が、それぞれの問題意識を実験に落とし込むことができれば、と

いう思いだった。それは、護岸整備された水路を少しずつ改善して、本来のごつごつした岩や土や水草のある水路に戻して行くような感覚かもしれない。そうすることで、そこには目的以外のたくさんのことが起きる。水路は水を、目的の田んぼにひくためのものだ。けれど、その水路に目的とは関係のない生物の営みが生まれ、関わりが複雑に絡み合っていくといったように、普通の人々が実験を作ってアウトプットするという行為が様々な目的以外の何かをざわざわと起こして行くかもしれない。例えば、見ている人が不快を表明するかもしれないし、それが何かの議論を生むかもしれない。また、実験の目的がうまくいかずに、実験以外の要素が拡大して見えてくるかもしれない。また、そこに立ち会っている人々の反応自体が、現在起きている人のありようを象徴するようになってくるかもしれない。この試みは今始まったばかりだけれど、目立たないところにいろいろな種を蒔くように、小さな試みを続けている最中であり、今まで蒔いた種を誰かが大切につなげて行ってくれたりしている。

### 引かれた線を解きたい

また、作品を上演することについての様々な問いそのものを、芸能という枠組みを使って観察してみるという試みに取り組む作品『私的解剖実験-6～虚像からの旅立ち～』を国内の三カ所で上演すること



3点とも：  
「私的解剖実験-6～虚像からの旅立ち～」（福岡、横浜、  
神戸ツアー／2012年12月22日～2013年2月4日）  
横浜公演：2013年1月13、14日 ST Spot  
photo: ©松本和幸



## つなごうとする意志 —2013年上半期の舞台を見て

松岡和子  
Kazuko Matsuoka

ができた。「作品」という線引きや、作品に対する「評価」という線引き、また、「ダンスを見る目的」という線引きをどのように解いて行くことができるか？それは自分が線引きしている物事をどこまで自覚できるか？という戦いでもあったと思う。そういった線引きが自分を閉じ込めている、その息苦しさをできるだけはつきりと感じられるようなシステムをわざと作ってみる実験といってもいい。その取り組みは本当に苦しい作業でもあったけれど、現実に向き合ってる感覚が濃くなって行くということが希望だった。そして、それが出演者全員にとって、また立ち会ってくださった方々にとって、線引きを解いて生きて行けるような力になっていけたら、という切実な願いもあった。

### 根を張って来たことの意味

私自身のアーティスト活動にとって、この三年間にこれだけの大きな転換期を迎えるということは予想していなかった。継続した支援を受けている期間は、私自身の根の張り方に大きな力を与え、震災というショックによって今までの問いに対して大きな示唆を与えられた。そして、新たなアウトプットの可能性を手にすることができた。今後、その取り組みが自分でも予期しない様々な目的以外の出会いや出来事を通して様々な枝葉を伸ばし、多様な活動へと押し上げ続けるだろう。今、日本は様々な危機的状況を迎えつつある。その中で生きるにあたって、私自身、押しつぶされないだけの根をはるることができた。そのことが、この状況の中でアーティストとして役割を果たして行く上で非常に大きいということは言うまでもない。

\*2010-2012年度セゾン・フェロー



手塚夏子(てつか・なつこ)

ダンサー/振付家。96年より、マイムからダンスへと以降しつつ、既成のテクニックではないスタイルの試行錯誤をテーマに活動を続ける。01年より自身の体を観察する「私的解剖実験シリーズ」始動。02年、私的な実験の小さな成果が「私的解剖実験-2」に結晶。同作品はトヨタコレオグラフィー・ワードファイナリストとして同年7月に上演。その後、ニューヨーク、シドニー、ベルリン、ポーランド、ジャカルタなど各地での交流や上演を行う。また、独自の手法でコンテンポラリーダンスに取り組むアーティストと対話し、彼らの手法について思考し体で試行する「道場破り」や、体をテーマに建築家や鍼灸医など様々な職種の方とのトークをし、観客を巻き込んでの実験を試みる「からだカフェ」など、自主企画も多数。10年より、国の枠組みを疑って民俗芸能を観察する試みであるAsia Interactive Researchを始動。

<http://natsukote-info.blogspot.jp/>

当財団評議員として、また翻訳者としてのお立場から、松岡氏に演劇界の動向について寄稿していただいた。  
(編集部)

2013年も半ばを過ぎました。

3・11から二年経ち、参議院選挙で自民党が圧勝したこの年は、演劇の分野では将来どのように記憶されるのでしょうか。

新装なった歌舞伎座開場の年？

寺山修司没後30年？

今年の私の劇場通いは立川志の輔の落語で幕を開け、作り手側の一員としての仕事は、演出家・蜷川幸雄率いる彩の国さいたま芸術劇場のシェイクスピア・シリーズ第27弾『ヘンリー四世』(二部作を2012年の晩秋に訳了)の稽古から始まりました。

新歌舞伎座の柿落しと寺山修司にまつわる諸イベントという大きな二点にも関連することですが、舞台をはさむ表と裏から見てきたこの半年あまりを振り返ると、私の頭に浮かんでくる一連の言葉群があります。

つなぐ、引き継ぐ、手渡す、伝える、残す、バトンタッチ、継承、などなど。

歌舞伎座の場合は、昨年秋に中村勘三郎が、今年に入って市川團十郎が亡くなり、その喪失を背負った開場であるだけに、日本を代表するこの伝統芸能の根幹を「継承」することの重要性が、歌舞伎界の内外で論じられ大きな課題となっています。

けれど、この「引き継ぐ」とか「継承する」という姿勢が今年には現代演劇の分野でも目につくのです。そのひとつのかたちも再演。以下に挙げるのがその例ですが、これらは私が見たものだけです、もっと他にもあるかもしれません。

### 1) 作・演出をしてきた作家による自作の再演。

小野寺修二演出、カンパニーデラシネラ『異邦人』(アルベール・カミュ作の同名の小説をもとに2010年に初演された)

松尾スズキ作・演出『マシーン日記』(松尾の主宰劇団、大人計画による初演は1996年。その後再演・再々演三回。今回は東京芸術劇場の制作、キャスト一新)

前田司郎作・演出『いやむしろわすれて草』(前田の主宰劇団、五反田団による初演は2004年、再演は2007年。今回の主催は青山円形劇場とネルケプランニング。不治の病に冒された主役を満島ひかりが好演)

ケラリーノ・サンドロヴィッチ作・演出『わが闇』(初演は2007年、KERAが主宰する劇団ナイロン100°Cの創立20周年記念公演。)

この戯曲の強さとナイロン100°Cの俳優たちの共演・競演力が確かめられた)

以上のどの舞台も初演は3・11以前ですが、それをまたいでも、一個の作品としての有効性は衰えていないことが証明されたと思います。

## 2) 先行世代の作家の作品を若手の演出家や、当の作家とは演劇の質を異にする演出家が演出する。

寺山修司作・演出『レミング』(寺山が主宰した演劇実験室◎天井桟敷による初演は1979年。今回の演出は維新派で作・演出を手がける松本雄吉、上演台本は松本と劇団少年王者館の天野天街)

つかこうへい作『ストリッパー物語』(つか自身の演出による初演は1975年。今回の構成・演出は三浦大輔。1975年生まれの三浦は劇作家・演出家として劇団ポツドルを主宰し、ハイパーリアルな演劇を創り出している)

この『ストリッパー物語』のパンフレットに寄稿した演劇評論家・扇田昭彦によれば、これは「東京芸術劇場が始めた新しいシリーズ企画Roots(ルーツ)の第一弾」であり、「現在の日本の現代演劇の重要なルーツである、1960年代から70年代にかけての小劇場運動の演劇、いわゆる「アンガラ演劇」の名作を、新しい世代の演出家の手で上演し、その魅力を再発見しようという企画」です。

新国立劇場で上演された別役実作の『象』(初演は1962年。今回の『象』は2010年に新国立で上演された舞台の再演)もこの系譜に入るでしょう。演出の深津篤史(しげふみ)は関西で活躍する劇団桃園会を主宰する劇作家・演出家で1967年生まれ。広島に投下された原爆によってヒバクシャになった男が、自分の背中のケロイドを見せ物にしてきたが、時が経つにつれて、周囲は男にそれをさせまいとする。いま見ると、広島は福島に重なり、舞台全面を埋め尽くす古着の山は大震災の被災地の瓦礫に重なってくるのでした。

小劇場演劇運動の始まった60年代後半以来、トップランナーであり続ける巨人ふたり、唐十郎と蜷川幸雄が組んだ『盲導犬』。1973年に唐が蜷川のために書き下ろしたこの戯曲を、蜷川は89年の再演を経て、40年ぶりに上演しました。宮沢りえを主役に得て、謎が絡み合う劇世界が鮮烈に蘇りました。

唐は昨年5月、転倒により後頭部を強打した。毎日のリハビリのおかげで諸機能の回復のきざしはあるものの、執筆に戻れるのはまだ先のようなとか。それだけに蜷川は唐戯曲という現代日本演劇の宝を、若い後継世代に継承させたいと強く思っているようです。

ここで、ちょっと毛色の変った劇団に触れさせてください。その名は「植吉劇場」。この5月に第3回公演『松ぼっくりⅢ』(作・古屋治男、演出・大岩美智子)を下北沢の「劇」小劇場で上演しました。チラシにある惹句は「植木屋が演る、植木屋の芝居」「あの、植木屋たちが帰ってきた。植木屋が役者なのか、役者が植木屋なのか」。そのチラシの裏面の裾には「庭木の剪定・消毒等、お庭のご相談承ります。この舞台のメンバーがお宅に伺います。見積もり無料!」とある。この集団の主宰者であり植木屋の親方でもある植吉こと高橋広吉(ひろ

よし)はれっきとした植木屋であり、役者です。もう何年も前から我が家の庭の手入れを頼んでおり、それよりもっと前から私は彼の芝居を見てきました。今回の舞台は、先代施主の日本庭園を残すか否かが主題でした。

六年前の劇団旗揚げ作『松ぼっくり!!』以来の共演者、三田村周三と高橋は共に故金杉忠男(1940~1997)主宰の中村座の中心メンバーでした。下町の原っぱを背景とする郷愁に満ちた金杉劇を演じる中村座は「アンガラ化石」と呼ばれていました。その中でガキっぽくも男っぽく面々が舞台の上手下手に立てられた「突撃板」に文字通り体当たり。植吉劇場はその心意気を引き継いでいます。

三田村は「三田村組」という集団の主宰者でもあり、一貫して若い劇作家に新作を委嘱してきました。現在幅広く活躍中の蓬莱竜太(モダンスイマーズ、1976年生まれ)や田村孝裕(ONEOR8、1976年生まれ)の作品に私が初めて触れたのは、三田村組の舞台を通してでした。

その蓬莱の今年の最大の仕事は『木の上の軍隊』(こまつ座・ホリプロ制作)だと思います。2010年4月に亡くなった井上ひさしが、沖縄のことを書きたい、書かねばならないと思いついて、ついに果たせなかった作品。井上が残したタイトルと原案のメモだけを手がかりに、そしてやはり井上が残した膨大な資料をもとに、蓬莱は井上の遺志を引き継いでこの戯曲を書き上げ、長らく井上作品を手がけてきた栗山民也の演出で上演されたのでした。日本の敗戦を知らぬまま、二年にわたり伊江島のカジュマルの木の上で暮らした二人の日本兵の物語。沖縄の置かれた状況は敗戦時から70年近く経ついまも根本的には変わらないと思われ知らされたものです。

そもそもこまつ座は井上ひさしの遺作を引き継ぎ、いまに生かすことを目標にしていると言っているでしょう。『木の上の軍隊』はそのコンセプトの結実です。

考えてみれば、演劇において「つなぐ、引き継ぐ、手渡す、伝える、残す、バトンタッチ、継承」ということをする筆頭は演出家です。古典を含む過去の作品を「いま」につなぐ、戯曲をスタッフキャストに手渡す、舞台と客席をつなぐ……。

その意味で、若い優れた演出家に出会えた半年でもありました。哲学者ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインを主人公に作・演出を手がけた谷賢一(DULL-COLORED POP主宰)、カフカの『審判』とその家族関係を踏まえた苦い家庭劇『生憎』(大森寿美男作、植吉が狷介な足の悪い父親役で出演)を鮮やかに演出した扇田拓也、ハロルド・ピンターの『帰郷 -The Homecoming-』を翻訳し、演出した小川絵梨子、演劇集団円の『ワーニャ伯父さん』を演出した内藤裕子などなど。

古典と言えばシェイクスピアですが、この上半期だけでも刺激的な演出のシェイクスピア劇を何本も見ることができました。

富士見市民文化会館キラリ☆ふじみの『ハムレット』(演出・多田淳之介)。乱雑に置かれた無数のパイプ椅子、客は好きな方向を向いて坐り、四方の壁に投影される映像を眺めるというオープニングにしても、観客が何回か別の場所に移動させられるという進行の仕方にしても、自由な発想の演出が痛快。

若い劇団カクシンハンの『リア』(演出・木村龍之介)、新宿の「雑遊」の狭い空間が爆発しそうなアナーキーなエネルギー、三十代の俳優、河内大和がエネルギーギッシュに老王を演じたのが新鮮でした。

子供のためのシェイクスピアカンパニーの今夏の上演作は『ジュリアス・シーザー』(脚本・演出・出演・山崎清介)。彼らにとって初のローマ史劇は、9人の俳優と人形により休憩なしで演じられ、息もつかせぬ緊迫感を生み出しました。

滅多に上演されず、知名度もいまひとつの喜劇『ヴェローナの二紳士』ですが、若い劇団ハイリンド(演出・西沢栄治)はこれを生き生きと弾むように舞台化し、観客を大いに楽しませていました。

翻訳者としては若い演出家や俳優がシェイクスピアに取り組み、またやりたいと言ってくれるのは何よりの励みです。

さて、これからの話なので書き忘れるところでしたが、1988年に開館した伊丹市のアイホールはこの秋「現代演劇レトロスペクティブ」と銘打つ企画を開催します。同ホールのディレクター岩崎正裕はその企画書で「60年代から90年代にかけて蓄積された演劇作品群は未来に向けた知的財産」と言っています。5回目となる2013年一つ目の作品は桃園会の第45回公演として上演される唐十郎作の『少女仮面』。演出は深津篤史。期せずして東京芸術劇場のRootsと肩を並べることになりそうです。

こうして挙げたような現象をから窺えるのは、過去を振り返り、現在の状況を確認して、それから先へ進むという姿勢です。3・11を体験したこの国で演劇に携わる人々はいま、ある者は自覚的意識的に、またある者は無意識のうちに、このような姿勢を取っているのではないのでしょうか。

ハムレットは言っています、「創り主は我々(人間)にこんなにも大きな思考力を授けられ過去と未来に目を向けるようにされた。その能力と神のごとき理性を持ち腐れにしていはいはずがない」(四幕四場)

同じ古典でも、戯曲には詩歌や物語と大きく異なる特質があります。それは、戯曲は「いま」演じられれば、ギリシャ悲劇であれシェイクスピア劇であれ、「現代劇」になるということです。次へとつなぐ「人」

がいれば、決して滅びません。逆に、そういう「人」が居なくなれば、たちまち滅びてしまう。

「つなぐこと」と「人」、それに尽きます。この夏南相馬市で見た相馬野馬追の残像とこの半年で見えてきた印象深い舞台を重ねるにつけ、強くそう思います。

付記: 本稿を書き終えたあと、8月の初めに渡辺えり作・演出・出演の『赤い壁の家』を見ました。イタリアのポンペイと日本の東北地方を結びつけ、甚大な自然災害によって断ち切られた人間の営みをつなぎ直そうとする意志と祈りに満ちた作品でした。60年代70年代演劇の華とも言うべき緑魔子、若松武史、田根楽子らを中心に据えた配役といい、本稿で取り上げた様々ななかたちの「継承」のひとつの極点を見る思いがしました。

(敬称略)



松岡和子(まつおか かずこ)

翻訳家・演劇評論家/セゾン文化財団評議員。1942年旧満州新京(長春)生まれ。東京女子大学英米文学科卒業。東京大学大学院修士課程修了。専攻は17世紀イギリス演劇。現代演劇協会(付属劇団雲)芸芸部研究生、『罪と罰』(演出・福田恒存)『黄金の国』(演出・芥川比呂志)に演出助手として参加。主な著書は『ドラマ仕掛けの空間』(創樹社)、『すべての季節のシェイクスピア』(筑摩書房)、『シェイクスピア「もの」語り』(新潮社)、『深読みシェイクスピア』(新潮社)。訳書は『ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ』『クラウド9』など。現在、シェイクスピア戯曲の全訳に取り組んでおり、既刊は『ハムレット』『ロミオとジュリエット』『マクベス』『リア王』など。1995年第2回湯浅芳子賞受賞(海外戯曲翻訳部門)。日本シェイクスピア協会会員、国際演劇評論家協会会員。

<http://homepage1.nifty.com/shakespeare/>

## viewpoint セゾン文化財団ニュースレター第64号

2013年8月31日発行

編集人: 片山正夫

発行所: 公益財団法人セゾン文化財団

〒104-0061 東京都中央区銀座1-16-1 東貨ビル8F

Tel: 03-3535-5566 Fax: 03-3535-5565

URL: <http://www.saison.or.jp>

E-mail: [foundation@saison.or.jp](mailto:foundation@saison.or.jp)

●次回発行予定: 2013年11月末 ●本ニュースレターをご希望の方は送料(90円)実費負担にてセゾン文化財団までお申し込みください。